

マダム・マツモトと神戸 (AJDF-Kobe)

大貫 秀明

まだわたしがロンドンでなんとも自堕落な院生生活をしていたある日、当時所属していたロンドン大学ゴールドスミスカレッジに隣接の(旧)ラバンセンターの所長であったマリオン・ノース(Dr. M. North)から呼び出しがかかった。それまでも何度となく、呼び出された経験はあったのだが、それらはほぼほぼお小言の場となっていたことから、その時も反射的に身が竦んだ記憶がある。

「この(小)荷物をマダム・マツモトに届けてほしいんだけど？」と女史が笑顔をとたえて依頼してきたのには正直驚いた。どうやら、どこかでわたしが近く帰国する予定のあることを知ったようであった。もちろんわたしはおもいきり引きつった笑顔ではあったもののその依頼を快諾した。ただ問題は、「マダム・マツモトって、いったい誰？」であった。英国のあの<クラス>の人が敬称として同性の方に「Madam」をつけることは管見ながら希であり、かなり別格の日本人がいるのだな、という推察は曇りっぱなしの当時のわたしの脳ミソでさえなんの躊躇もなく瞬時に確信へと変わったことを憶えている。そう、これがわたしの松本千代榮先生との「出会い」であった。

時は流れ・・・、1993年8月に開催された「全日本高校・大学ダンスフェスティバル」に合わせて諸外国からの学生グループを招聘するという遠大な企画が立てられた。その準備はかなりたいへんで、女子体育連盟の先生方以外にもかなりの外部の者が動員された。インターネットがまだなかったことから電話、Faxを駆使して外国在の関係機関と連絡・調整をはからざるをえなかった。そのあたりの渉外業務をわたしと原田宗彦先生(現大阪体育大学学長)が担った。その際に、まことに不幸な出来事も発生した。英国からの学生ダンスグループを率いて来日した男性指導者が急逝されたのである。くも膜下出血であった。このあたりのことはここでは詳細には述べないが、ともかく事態にあたった松本先生の対応と判断は、大会責任者としてまことに立派すぎるほどに立派であった。残されたご家族へのケアも長きにわたって関与しておられた。マダムここにあり。爾来、わたしの毎夏の神戸行きが長きにわたり続くこととなり、あの悪夢のような阪神淡路大震災が起こったのはその1年半ほど後(1995.1.17 5時46分)であった。

1995年の「全日本高校・大学ダンスフェスティバル(AJDF-Kobe)」は神戸での開催を断念し、急遽東京の中野ゼロホールでの開催となった。この時も、大会の舞台裏は修羅場であったと記憶し

ている。今思えば、大会の運営側も、また参加してくれた生徒・学生たちの心労、体力消耗は相当なものであったような印象をいまだにもっている。そんな中、ショッキング・ピンクの大会ロゴ入りTシャツを着た松本先生が客席の壁際に立ち続け、客席と舞台の両方に目を配っておられたことを鮮明に思い出すことができる。あのご年齢にしてあの鮮やかなピンクは当方にもショッキングであったが、どうやら当のご本人は周囲の目を気にする気配などまったく窺えなかった。異例づくめの大会が無事に終えた際には、運営にあたった役員の先生方は込みあげてくるものを我慢できずにいたが、松本先生においてはついぞハンカチを目元に運ぶことはなかった。

昨年(2022)の9月8日に英国のクイーン・エリザベス2世が逝去された。亡くなる直前まで重責な公務に携わり、周囲に異常を感じさせなかったようだ。そして、その1週間後にここ日本でマダム・マツモトは泉下の客となられた。エリザベス享年96、マダム・マツモト同102。こうした「生」の仕舞い方を同時代の者として目撃させていただいたことをこの偉大なお二人には心より感謝したいと思っている。そして、わたしを松本先生に、また結果的には神戸にも導いてくれたノース女史は2012年に他界した。

さて、心残りは、件の(小)荷物の中身が何であったかを両先生にお訊ねすることを失念してしまったことである。

「さようなら、マダム。」



補足：松本先生を「マダム・マツモト」と称呼していた旧ラバンセンターの大御所の面々。(左から) Dr. Valerie Preston-Dunlop, 故・Dr. Marion North, Mirella Bartrip, 故・Bonnie Bird (各人の人物詳細につきましてはGoogleなどで検索を。)